【98】

氏　名(本　籍)	シャルマ　ニランジャンクマー（ネパール）
学位の種類	博　　士（医　　学）
学位記番号	博　甲　第　1140　号
学位授与年月日	平成 5 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 1 項該当
審査研究科	医　学　研　究　科
学位論文題目	手術不能肝癌に伴う食道静脈瘤に対する内視鏡的硬化療法の臨床的検討 ――とくに肝硬変併存例について――

主　査	筑波大学教授	医学博士	大　菅　俊　明
副　査	筑波大学教授	医学博士	板　井　悠　二
副　査	筑波大学教授	医学博士	稲　田　哲　雄
副　査	筑波大学教授	医学博士	大　野　忠　雄
副　査	筑波大学助教授	医学博士	金　子　道　夫

論　文　の　要　旨

＜目的＞

食道静脈瘤出血の死亡率は21％～50％であるとされており，食道静脈瘤出血に対する緊急出血，および再出血防止のための治療手段についてはこれまで多くの研究が続けられてきた。しかし，原疾患が手術不能肝癌を伴う肝硬変症である場合には，標準的治療法である外科的治療適応とならないため，著しい苦痛を伴うバルーンタンポナーデと輸血が続けられることになり，また，運よく止血したとしても，引き続き再出血の恐怖にさらされて生活することを余儀なくされている。そこで，このような患者に対する治療手段として，最近普及しつつある内視鏡的硬化療法(以下，硬化療法)の有用性について臨床的に検討した。

＜対象および方法＞

対象は1977年10月から1989年 2 月16日の期間に筑波大学附属病院において食道静脈瘤を伴う手術不能肝癌を合併した肝硬変症例のうち，食道静脈瘤出血に対して緊急硬化療法を施行した症例（緊急止血例）7 例，および硬化療法以外の保存的手段で一旦止血した状態の時期に入院し，再出血防止を目的として硬化療法が施行された症例（待期的治療例）13例の計20例であった。20例の性別は男性17例，女性 3 例，年齢は43才～80才に分布していた。肝硬変および肝癌の診断は腫瘍マーカー，腹部超音波検査，computed tomography（CT）および肝生検にて行った。肝癌の程度は肝癌が肝両葉に認められた症例が11例，肝両葉または肝右葉にびまん性に浸潤した症例が 3 例で肝右葉に複数の塊状に認められた症例が 6 例であった。また，肝癌による門脈内腫瘍塞栓が20例中 9 例に認め

られた。肝硬変の重症度はChild A例が2例，B例が6例，C例が12例であった。硬化療法の有用性を緊急止血例における緊急止血率，待期的治療例については硬化療法後再出血率，生存期間および遠隔死因から検討した。なお，硬化療法手技は硬化剤として5％ethaolamine oleateを用い，使用にさいして血管造影剤であるiopamidolを混じて，X線透視下に食道静脈瘤内に注入し，食道静脈瘤とともにその固有供血路を閉塞する手技である。

＜結果および考察＞

急性出血例7例については緊急硬化療法にて全例が止血された。止血後，1カ月～10カ月で全例が肝不全にて死亡しているが，死亡までバルーンタンポナーデと輸血から開放された。待機的治療を行った13例については4例に再発を認め，3例には再治療を施行したが，残りの1例は再治療を拒否し再出血をみたものの，食道静脈瘤出血で死亡した症例はみられなかった。なお，20例について，硬化療法の合併症は5例に発生したが，保存的治療にて治癒している。そこで，切除不能肝癌を合併した食道静脈瘤に対して硬化療法は極めて有効な治療手段であると結論した。

審　査　の　要　旨

肝癌に併存した食道静脈瘤に対する治療は，肝癌が種々の理由から手術不能とされた場合には，食道静脈瘤に対しては根治的な治療を行わないというのが一般的である。本論文はそれを内視鏡的硬化療法によって治療をすることを検討し，注目すべきいくつかの事実を明らかにし，とくに硬化療法では再発しても再治療さえ行っていれば食道静脈瘤出血死を免れる可能性を明らかにした。ついで，審査委員からの質疑があり，的確な解答がえられたため，著者は研究者として必要な技能と知識を有するものと評価した。

よって，著者は博士（医学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。